

28.

四月八日は虚子忌である。その日に床にかけたままにしてある一幅を眺めながら、今回はそれについて語ってみましょう。

実は私の作った句を家内が表装させたのであって、人に見てもらうほどの品ではなく、ただただ私どもの思い出に役立てばよいと思っている。その句は

春空に虚子説法図描きけり 青畝

知恩院で七回忌の法要があった時に詠んだ。

桜が咲き公園は人出に賑わっているし、うち仰ぐひろびろとした空はうすく霞み、日の光も長閑かに柔らかくさしている日で、お勤めの鐘がいかにも京都だなと心にひびくのであった。

そんな空をじっと見上げると、私はいろいろの虚子先生のイメージが浮かんきて、丁度スクリーンに次は何が写るかという興味を期待する。そうすると、俳句は「客観写生」でなくては…とおっしゃるお姿が出る。又「古壺新酒」の譬を以て形式は変えなくても内容は新しくすべきだ…と唱えられるお姿が浮かぶ。又々「花鳥諷詠」とは花と鳥に限らない宇宙大自然の相で、芭蕉も笈の小文で造化に従い造化に還れと言ったように自然を詩に詠むのが俳句だよ…と親切に教えられる慈顔となってくる……と言うふう先生に思い出が生き生きと湧いてくるのであった。

私は釈迦説法図というものを見た。いまの虚子先生の姿こそ例えるならば虚子説法図ということができると考えてともかく自信を抱いてこの一句を得たのであった。

29.

土芳の「三冊子」にこんなことを記しているのです。

「師（芭蕉）のいわく、絶景に向かうときはうばわれて叶わず、物を見て取る所を心に留めて消さず、書き写して静かに句にすべし。うばわれぬ心得もあることなり。……」

初めて句を志す人は絶景ばかりをねらう癖があります。絶景を見ずに句ができぬとも考えているのでしょうか。

実際、われわれはこの反対側で、絶景なんてとても容易に句にまとめることはできないのです。心がしずまって興奮状態から冷めると、その時のイメージが灼きついているから平常心で詠むのが案外に成功し易いので、この経験は確かだと思います。

で、日常の目に触れ耳に聞く平凡な事柄を句材として、それを詠むことを初心者ばかりでなく誰にも奨励致します。

日常のことがらは平常心で注意すると、かえって気づかなかった興味を発見し、そして創造力をもたらす可能性が湧いてますます面白くなります。絶景のばあいの興味は酔ってしまった状態になっては物を忠実に見つめられなくなるので、その興味は後でぼやけて何が何であったか、読者に伝えることができないわけです。芭蕉でも松島では句がなかったと書き加えています、一寸参考までに申し上げます。

30.

現代の社会生活がいかにも息苦しい思いであるとして、それにしばらく目をそむけるべく社会とはあまり関係の薄い自然の風景に視線を向けようという立場で俳句を作る人達がある。

又それとは反対に現代の社会生活を句材として自分たちの戦から意気込みを表現すべきであるとして、それこそ生きているしるしだからという立場で俳句にしようとする人たちがいる。その他の立場もあるようである。

俳句は宗教に似たものであるから、現象の奥に潜んでいる哲学的な思想を示すべきであると唱えた人たちも確かにある。

私はいずれを是としいずれを非としたいくはない。その人たちの偽らぬ心を表現上に生かした作品を採る。だから第一に表現の巧拙が問題を解決すると思う。

表現に成功した作品は、いろいろな立場が十分に理解される。従って新しい創作を素直に認めることが可能である。

2024.02.27